仏教文学の世界

今成元昭

NHKブックス

307

今成　元昭（いまなり・げんしょう）

1925年　東京都に生まれる
1948年　早稲田大学文学部卒業
現　　在　国士舘大学教授．早稲田大学講師
専　　攻　日本中世文学
主な著書　「平家物語流伝考」．「古態本軍記物語」（編著），「概観日本文学史」（共著），「宗教と文学」（編著）
現 住 所　〒162　東京都新宿区早稲田南町55

NHKブックス 307　　検印廃止

仏教文学の世界

昭和53年1月20日　第1刷発行

著　者　今成元昭
発行者　藤根井和夫
印刷　三和印刷
製本　三森製本
装幀　栃折久美子

発行所　日本放送出版協会
東京都渋谷区宇田川町 41—1
郵便番号150振替東京1-49701

落丁本・乱丁本はお取替いたします

仏教文学の世界

今成元昭

NHKブックス

307

© 1978 Genshō Imanari

はじめに

仏教文学とは、一般にはなじみの薄い名であろう、それもそのはずで、国文学研究者の間でも近々半世紀余り前から用いられだした名称であるし、まして本格的な研究が進んでからの歳月はまだ二〇年にも満ちてはいないのである。仏教文学研究会という全国的組織の学会が、毎年一回『仏教文学研究』という論文集を刊行しているが、その第一二集（昭和四八年）に「仏教文学とは何か」という特集を組んでいるという事実を見ても、仏教文学が、その概念の規定さえはっきりしていない、若い研究分野に属するものであることがわかる。そこで〈仏教文学の世界〉に足を踏み入れる前に、まず私なりの仏教文学の規定をし、次に本書の構成について一言しておこうと思う。

キリスト教における唯一絶対の創造神にくらべると、大日・阿弥陀・薬師・釈迦などと沢山の登場者を見る仏の存在は大変わかりにくい、もっとも仏陀（ぶっだ）というのは梵語（buddha）の音写で、真理に目覚めた者という意味であるから、それを誰といって一人に限定するような性格のものでもないのであるが、それだけに莫然としている感じがするのである。そういう仏を、大乗仏教では法・報・応の三身に分けて説明することがある。その場合、法身仏（ほっしんぶつ）とは宇宙の真なる

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

理法そのものを仏身とみなしたもの、報身仏とは、菩薩が願と行とに報われて得た仏身、そして応身仏とは教化の対象に応じて身を現わした仏をいう、つまり法報応の三身とは、真理と、その真理を具体的なものとする智恵と、その真理や智恵を人間に説くために出現した人師とであって、その一々を独立した仏身と見なしたものであるが、しかしおのおのの仏身は、他の二身を兼備しなければ、個別身としての完全な機能をもまた発揮しえないものであることはいうまでもない。そこで三身即一身・一身即三身と説かれるのである。

ここで話を釈迦牟尼にしぼることにしよう、一面からいえば、永遠の真理や、その真理を具現する無限の智恵は、釈迦牟尼がこの世に現われようが現われまいが厳として存在するものであるが、しかし、もし釈迦牟尼が人間として出生し、人間の言葉で説くことがなかったとしたら、仏法も仏智も人間の所有とはならなかった、ということも間違いのない事実である、したがって、釈迦牟尼自身が、

我、仏を得てよりこのかた、経たるところの劫数（時間）、無量百千万億載阿僧祇（永遠）なり、常に法を説いて、無数億の衆生を教化して仏道に入らしむ（『法華経』如来寿量品）。

と宣言しているように、彼は生身の人間であるとともに、無始の過去から無終の未来に及ぶ永遠の仏（久遠実成の本仏）であり、法報二身を具足した応身仏である、とするのが仏教の仏陀観である。

右の仏陀観は、仏教文学というものを考えようとする時にまず思いおこさなければならないものである。なぜなら、生身の人間釈迦牟尼の語る人間の言葉が即ち仏の真言にほかならないということになり、しばしばなされているような、文学と宗教とを二元対立的なものとする考え方の誤りであることが主張されるからである。

釈迦牟尼は大衆教化のために、説き難い真理をあらゆる手段をもって言語に表現した。

吾、成仏してより已来、種々の因縁（由来談・機縁談）・種々の譬喩（たとえ話）をもって広く言教を演べ、無数の方便（仮構法門）をもって衆生を引導して、諸の著を離れしむ。（『法華経』方便品）

と釈迦牟尼は言ったが、たしかに、

衆生の心の念ふ所、種々の行ずる所の道、若干の諸の欲性、先世の善悪の業、仏悉く是れを知しめし已って、諸の縁（因縁）・譬喩・言辞方便力を以て、一切（の衆生）をして歓喜せしめたまふ。（同前）

ことに成功しているのである。生まれ、結婚し、子を持ち、悩み、励み、悟り、説き、そして死んでいったという釈迦牟尼の一生そのものが、すでに本仏の仕組んだ方便の人間劇であったということになるわけであるが、その応身仏の「巧に諸法を説き、言辞柔輭にして、衆の心を悦可せしむ」（同前）る作品こそ、まず仏教文学の原点に置かれるべきものといわなければならない。

ある人は疑いをさしはさんで言うかも知れない。仏典の中には極めて難解な哲理の書もあるが、それらをしも文学といえるであろうかと。しかし、それらもまた、宗教書である限り文学の範疇に入るべきものである。たしかに情にうったえないものは文学ではないのであるが、また、情に関わらないところには宗教も存在しないということを忘れてはならない。宗教の究極は信仰にある。そして信仰の地盤は知ではなくて情なのである。宗教哲学を如何に深く追求したところで、それが智解の段階に止まる限り信仰とは無縁であり、宗教となるものでないことはいうまでもない。したがって、いやしくも宗教の言辞であるからには、それが如何に理論的なものであろうとも、説理の果てに信仰の火をともすもの、いいかえれば哲理の深さが感動を呼び、「心を悦可せし」めて人間変革を誘うものでなければならず、文学に背反することは許されないのである。

さて生身の人間釈迦牟尼が応身仏であったということは、とりもなおさず、人間誰もが釈迦牟尼の跡を追って応身仏になりうるということにほかならない。そして事実、応身仏としての作用を果たした人びとは古来多く居り、それらの人びとが書き残したところの、仏教文学の名に価する作品も決して少なくない。しかし、もし日本文学史の上に、質量ともに充実した〈仏教文学の時代〉というものを特定するならば、古代後期から中世初頭にかけてをその時期とすることができる。

それは仏教界が国家と支配層の繁栄にのみ奉仕していた姿勢を遂次転じて、日本的に純化した民衆仏教を完成するに至る時期に当っている。

つまり仏教文学は、仏教民衆化の陣痛と生誕の言葉として最も燃えたのである。そのような仏教文学を主導したのは、大寺に寄る名僧・高僧ではなくて、草庵にあったり民間に出たりして布教に努めた、沙弥（しゃみ）とか聖（ひじり）人とかいわれる人びとであった。

そこで本書は、日本文学史上に画期的な、〈仏教文学の時代〉における〈聖人〉の文学に照明をあてることにした。

仏教界が上流支配層との癒着によって外的隆昌を誇っていた律令・摂関制社会にあっては、宗教的純粋性を保とうとする者は、世俗からなるべく遠い位置にいなければならなかった。だからこの時代の聖人たちの精神や行動や教説やは、第三者によってすくい上げられないかぎり、多くの人びとの耳目に触れるものとはなりえなかった。

そこで、そういう隠れた場に繰りひろげられていた感動的な世界を広く世に押し出したいという、宗教的かつ文学的な要請がなされるようになった。

こうして、『日本霊異記』に前駆を見せたところの、『日本往生極楽記』以下の説話集が続出することになり、沈滞気味な古代末期の文学史に豊かないろどりを添えたのである。

中世を迎えて、地方武士や下層民までが、社会に果たす自分たちの役割の重みを主張できるようになると、聖人たちはもう隠れた存在である必要がなくなった。むしろ彼らは、深く大衆と交

わり、広く凡俗に語りかけることによって、その宗教的純粋性に磨きをかけることができたのである。

こうして、源信の『横川法語』に予兆を見たところの仮名法語が多く記され、また説話集も説話と法語との混融形態をとるようになって、中世初頭を、日本文学史の上に稀に見る思想文学で飾ることになった。

このように、我が国の仏教文学は、聖人たちの説話集から仮名法語群へという史的展開の上に主な流れをたどることができるのである。

説話と法語とのほかに、本書は、仮構性の強い仏教文学として『方丈記』と『平家物語』とをとりあげた。

『方丈記』の筆者蓮胤は、大原聖の禅寂から「聖人」と呼ばれている人で、説話集『発心集』の編著者でもあるし、『平家物語』は、作出にも管理にも仏教界が関与し、芸能的民間布教者である琵琶法師によって語りあるかれた作品である。これらの外的条件を一見しただけでも、両書の仏教文学的資質は推測されるであろう。

『方丈記』（一二一二年成る）と『平家物語』（十三世紀後期成る）は、時代的には必ずしも法語に先んじるものではないが、思想的には説話と法語との中間に位置するものである。そこには、現実の穢土と他界の浄土とを二元的なものとして一端発心すると往生の道に邁進する説話の主人公

たちとは違い、来世を欣求しながら現世の繋縛に悩む人びとの姿が多く描き出されている。これは、浄土をも実人生の場の問題として煮つめた法然・親鸞・日蓮らの深遠にして明澄な法語の世界への脱皮の苦しみを写したものといえる。

『方丈記』が、空間の無常を集約したかたちでの〈個〉の実存に思いを沈め、『平家物語』が、時間の無常を具現している歴史との葛藤を通して〈集〉の本質を凝視するという、この両書に見られる対極的な人間追求のあり方は、厳しい古代末動乱を体験した中世初頭の人びとの、深刻な苦悩と真剣な模索の振幅の広さを象徴的に示すものといえようが、右の、内奥への掘り下げと、外界からの照射という二方法が、法然・親鸞と日蓮とによってそれぞれなされた方法であったということも、仏教文学の展開上見逃せない事実なのである。

なお、本書の一部は、五〇年度NHK教育テレビの市民大学講座で放送したものである。この書を刊行するにあたっては、日本放送出版協会の品川高宣氏にひとかたならぬお世話になった。心から感謝の意を表する次第である。

昭和五十二年十月十三日

今成元昭

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

はじめに

一　説話文学

『日本霊異記』の世界……15
私度僧景戒　行基の往生話　連帯の志向　仏法実在の体験　霊異の可能性

往生伝の世界……33
往生伝の輩出　厭離穢土の要因　不浄を観ずる　殺生の報い　反俗の聖たち　増賀の反骨　名僧より聖人　至心の念仏

二　仮構文学

『方丈記』の世界……73
無常の把え方　四大破壊の相　陶酔からの覚醒　維摩居士にならう

『平家物語』の世界……97
平家亡びの物語　象徴的手法　亡びへの階梯　愛の破壊　今の一所に懸ける　往生する人びと　六道輪廻の果てに

三　法語文学

法然・親鸞の世界……135
浄土教と仮名法語　専修の思想と文体　無上仏は自然　自然と道元の万法
絶対の帰投　悪の上での善悪　煩悶は絶えず
日蓮の世界……171
旃陀羅宣言　末世を生きる　法華経の行者　現実の典型化　臨場感の創造
共同感の重み

一説話文学

説話文学は、人生の一断面を鋭くえぐる短い話によって、何らかの説示をおこなおうとする文学であるから、その大部分は、仏教者が教説の目的で編んだ説話集に収録されている。本章では、説話集の嚆矢(こうし)『日本霊異記』と、『日本往生極楽記』以下の往生伝類によって、説話文学展開の相を探ってみたい。

『日本霊異記』の世界

私度僧景戒

仏教文学としてまとまりを持った最初の作品は九世紀の初頭に奈良薬師寺の僧景戒によって選ばれた説話集『日本国現報善悪霊異記』三巻である。『日本霊異記』には各巻に序があってその選述目的が明示されている。

〃人が、あるいは名聞利益を追って悪報を受け、あるいは求道修行を勧めて善報を受けるという例はよく見聞するところであって、善悪の報は影の形に随うが如くである。よって善悪の状・因果の報を示して人々に是非を定めさせようと思うが、『冥報記』『般若験記』のような中国の書に拠ることをいさぎよしとしない。そこで耳にした我が国の奇異しい話を集め記したのだ。〃

と景戒は言う。そして「祈はくは奇記を覧る者、邪を却け、正に入り、諸悪作すことなく、諸善奉行せむことを」祈り（上の序）、「庶はくは、地を掃ひて共に西方の極楽（阿弥陀仏の浄土）に生まれ、巣を傾けて同じく天上の宝堂（弥勒菩薩の浄土。兜率天）に住まむとするものなり」（下の序）というのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com